

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	緑蔭獨語
Author(s)	中野, 峰夫
Citation	龍南會雜誌, 171: 56-63
Issue date	1919-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6502
Right	

かうした環境の中にひとりぼつねん坐つて東北四百里の君を偲んでゐる。最後に君の御自愛を心から祈つてこの名残をしいペンを擱かして頂かう。(了)

綠 蔭 獨 語

一、三、丙 中 野 峰 夫

●森の町は、愈その本体を呈して來た、今少し雅かに呼んで、青葉の町といつたら如何だろう。暑い處だけにこの青葉が尙更有難ひ、青葉の蔭にチョイト腰を鉤ろして睡氣と戦ひつゝ獨語いてみるとしやうか。

●剛毅朴訥！いゝひいきだ、いかにも敝衣破帽、小倉の袴に杉の下駄といふ手合の、熊襲の子孫や薩摩隼人の後裔でございといはんばかりの、あらぐれ書生の叫びさうな言葉だ。

●敝衣破帽のみを以て剛毅朴訥だと思ふ時代は既に己に過ぎ去つた。まさか、敝衣破帽そのものが剛毅朴訥だと思ふ者はあるまいが、之とあまり違はぬ位の考を懷いてゐる者がないでもないらしい。

●自我に覺醒し、デモクラシーの振盪を経て來た吾々は、今更、形式や辭句に捉はれてはならぬ、バラは愛の、美の象徴である、愛美そのものでは勿論ない。併し、バラのあらはすところには幾分自然的の必然的の連鎖がある。

●言語や文字には自然的必然的の關係は存在しない單なる符號にすぎない。漢字の如きは幾分趣を異にするけれども、それも今日となりては、西洋文字と全様符號であり符牒であるに過ぎない。

●剛毅朴訥！吾人は文字に捉はれてはならぬ。それが示す眞個の意味をつかまねばならない。現今の吾々が發見し創造し得らるゝ最高最深最廣の意味をそれと與へなければならぬ。

●意味は數學的眞理の如く時空を超越して眞理なること能はぬ。勿論所謂客觀的妥當性としての眞理は一だと云はれるかも知れないが、それも要するに程度の問題であつて、數學の如く絶對的ではない。

●創立當時の龍南は、日清戦争後のそれと異らねばならぬ。日清戦争後の龍南は日露戦争を経たそれと異らねばならぬ。そして、日露戦争後の龍南が大戦

役を經過した今日のそれと異らねばならぬこと勿論だ。

●この變遷と共に剛毅朴訥もその意味を漸次改造してゆかねばならぬ。卅年前のそれと現今の剛毅朴訥とが全じ内容をもつならば時代の推移も文化の發展も悉く否定されることになる。それは、剛毅朴訥を解する者は吾々不完全なる人間——文化發展に與つてゐる自然人であるからである。

●然らば吾々の解すべき剛毅朴訥は何であるか、又あらねばならぬか？茲に至つて自分は窮せざるを得ぬ。之にどんな意味を與へていゝかわからなくなる。剛毅朴訥！いゝ言葉だ、しかしそれが何だ！！

●剛毅朴訥！それに捕はれるからいかなのだ、そんなものがあるから、どうとか強いて今日の意味にやきなほさうといふことに捕はれるからいけないのだ。吾々はそんな標語の有無に捕はれることを要しない。●さう考へてくると、この語は殊更必要のないものとなつてくる。さうだ、實際さうなのだ、殊更仰山に大聲疾呼して「剛毅朴訥」を絶叫すべき何等の必要も理由も存在することを見ぬのである。

●吾人は、剛健真摯であり毅然として俗を避け偽を去り、純真にして汚れの一點をもそめぬ質朴簡素を持続すべきであるといふのならば受取れぬこともないではない。しかしそれが何故殊に龍南に必要なのか？

●局部に割據すべき時代ではない。獨自の發展に資するに廣く智識を世界に求むべきを以てする時代であつて、戰國時代の如き一國一城に之れ依る時代ではないのであるデモクラシーの時代であるのである。●剛毅朴訥が龍南に必要ならば天下にも必要である。何を苦しんで龍南のみが剛毅朴訥の拔殻を振り廻す必要があるか。その眞精神をつかめといふのならば天下何人も全様であつて殊更龍南の問題ではない。●吾人は春櫻が咲き秋紅葉が染むると全じく屹度一年に一度は總務から「剛毅朴訥」を聞かせられる。いつも乍ら之はいふ筈になつてゐるからいふのだ。しかし思はれぬ。一個の型である。儀式にすぎない。

●新入生に吹き込む人が死んでゐる。言葉が死んでゐる。新しい生命を之に與へることをよくせぬのだ。殊に日本の殆んどあらゆる地方から集つた生徒達に

はこのかたくるしい無内容の言葉に一向其鳴せぬのだ。

●漱石さんの「猫」？にヴァイオリンをかつて人にかくれてそつとかなぐることをかいてある。その頃の剛毅朴訥は音楽を入れなかつたのだらう。二葉會が生れ青柳會が起る今の龍南と何等の相違だらう？

●その當時より現今は進んでゐる。剛毅朴訥も乗馬會と共に二葉會青柳會を併存せしむる丈の寛容を示さざるをになくなつた。所謂剛毅朴訥は何處にあるのだらう？

●その精神をいへば天下何人も共通に必要であるがその形式は必要でないのみならず實際存在もしてゐない様な剛毅朴訥を殊更我が龍南に叫ばなければならぬ理由を不敏なる自分は見出すことができぬ。

●のみならず、やゝもするとその殻に捕はれて殊更に敝衣破帽をつけ杉下駄を引きずり、櫻の杖を振り廻はして以て自ら得たりとし蠻カラのハイカラを得意氣に見せつけて「吾こそ龍南健兒」だと思ふ者もある。

●吾々にとつてはこの標語を殊更必要とするを見ぬ

そんなものはあつてもなくてもいいのだ。之に捕はれ之に封じ込められる様では却つてない方が況しかも知れぬ。拔殻は早く拔ぎすてるが自由になつていい。

●人間は自我の解放を必要とする。デモクラシーの叫ばれざるべからざる所以は茲に在る。自我の解放によつてのみ眞の個人の満足が得られる。文化の發展も亦之によつて最も大なるを得るのである。

●デモクラシーに何人が如何なる解釋を與へやうとその歸着するところは各人の自我の完全なる發展を可能ならしむることであらねばならぬ。自我の解放？之がデモクラシーの目指す最後の標的だ。

●個性を没却する劃一的な、悉く異なる千態萬様のものを全一形式の下に全じ高さに全じ大さに全じ深さに造り成さうとすることはデモクラシーの正反對である。デモクラシーは凡ての者を悉く生かすことである。

●演壇でも上つて口幅つたいことを言ふ先生達が平氣で專擅な反デモクラシーを敢てしてゐるから堪らぬ。演壇上の彼と平素の彼とは全く、別物の様な人

がある。下村君に云はすれば現代の二重生活は止むを得ぬ。

●現代の体制の下では止むを得ないといつてそれを口實に、或は、いゝことにして平氣で二重人格を併存して生活する人達に對して自分は寛大でありぬ彼等にそれを打破して純一な人格に生きよと忠告する。

●二重人格でゐて左程心の中の反噬や葛藤を感じぬ様な人は結構なお芽出度い人である。併しかゝる人達は自分から見ると人間の形をした動物にすぎない二重人格などと人格の文字を與へるのが惜しくてならぬ。

●美と共にあらゆる醜を眞向に凝視して自分の中に潜むあらゆるもの、正体を見極めてそれ等が眞個に目指すところを正解して、各その處を得せしめ以て全体としての自我が眞に歩むべき道を發見せねばならぬ。

●トルストイの苦悶そのものは、たとひそれに非常な全情は起るにしても、吾々にとつて左程有難いものではない。その苦悶せる彼を解し、その苦悶の所

以を知るとき吾々は彼を愛し彼を敬し彼を漱せざるを得ぬ。

●平塚雷鳥か天勝かが松井須磨子の死を語つて「人間として松井さんはわらいが藝術家としての彼女には感心しません」とか云つてあつた様だが、茲に吾々はこの言葉について考へて置く必要があると思ふ。

●茲に自分が言はうとするのは須磨子の死が果して稱すべきや否やについてではなくてその人を稱しながらその藝術家を稱しないことそのことについてある。一個の人間を人と藝術家とに二分せるは何故だらう？

●自分は、こんなことを云ふ人は全体としての人間即人格として考へないで一人格を科學的分析によつて二重にも三重にも分けて考へやうとする誤謬から來たのではあるまいかと思ふ。

●人格者なる人は科學も道德も藝術もその人としての内容としてもつてゐる。しかし、科學なり道德なり又は藝術なりがそれ／＼でその人だとは云はれない。之等は人に屬するものであつて、人が屬するの

でない。

●藝術家として如何であらうとも人としてゐないといふ賛辭をうけた須磨子は、この人から受くべき最高の賛辭であつたことを満足とせねばならぬ。人格！その人格を離れた藝術は藝術ではない。

●婦人問題が大分やかましくなつて來た。デモクラシーの世の中に婦人を除外するいはれが全く存しない。婦人も猶人間である。男子と全様人格者である。デモクラシーが婦人の解放を要求するのは勿論である。

●今頃聲を大にして婦人問題を論ぜなければならぬ程しかく左程に壓制の下に呻吟してゐた婦人は實に氣の毒の至りである。加之、之迄それに平氣でゐた男子も憫れまるべきものである。

●理論としての婦人問題は略型がついて居る。彼等も人間である、世界人口の半分である。人格者である。人として取扱はるべきは勿論である。解放せらるべきは勿論である。目下は只實行如何の問題が在るのみ。

●參政權も與へらるべきである。高等教育も受けし

むべきである。凡ての公職にも就かしむべきである。實際の仕事は彼等自身が自ら解決すべきものである。只彼等が婦人なるが故にといふことを理由として人間界より疎外されてはならぬ。實際上の仕事に堪ふるや否やの問題は男子についてと全様に取扱はるべきだ。

●口幅つたいことを云ふ天下の名士や識者と云はれる人達が一度自己の周圍を正視したら如何に慚愧に堪へないことだらう。如何に身の廻りの虚偽に充滿してることだらう、如何に不徹底な生活をしてゐることだらう。二重はおろか四重にも五重にも生活してゐる。平氣で人の前に自己を主張し得る圖太さに呆れる。

●その妻女は娼婦だ。肉欲遂行器に過ぎない。着物や何かでだましてある、魚の骨で犬をつつておく様に。本當の人格者として取扱はれないで、眞の愛情を受けもせず與へもせないで全棲してゐる動物の多いこと！

●自分は、あまり世の中のことを云ひすぎた様だ。人の事を批評しすぎた様だ。そんなことをいふ資格

があるかと人から問はれたら只赤面して下を向く外ない。にもかゝはらず、自分は矢張云つてみたかつたのだ。

●自分は自分の醜を知つてゐる。他の何人よりも明確に精細に自分自身を知つてゐる。他人の到底氣付くことのできぬ汚點や罪惡を懷いてゐることを知つてゐる。けれど又人の知らぬ美點も持つてゐると信じてゐる。

●如何なる方法に訴へても本當の自分を人に知らせることは永劫できぬ相談だ。ある表象を介して多少の連絡を世の中にもつてゐるにすぎない。自分は到底自分だ。本當の自分を生かすのも殺すのも自分のみだ。

●自分は罪惡を犯してゐる。日々犯してゐる。そしてその罪惡をなるべく人から遠けておきたい。虚偽が生じて、更に罪惡を増してゆくばかりだと思ふ。思ひきつてあらゆる罪惡をさらけ出さうかとも思ふ。●徹底したい！罪惡でも何でもいゝそのものの中に頭をつきつけてその眞底の本体をつかんでみたい。凡てのものを悉く見つくし、食ひつくしてしまひた

い。自分はあまりに貪欲だ、自分はあまりに利己的だ。

●自分は決して自分を立派なものだと思はない。思ひたいけれども思はれないもの。自分はよく自分の罪惡に苦しめられる。何とかして人格者になりたい何とかして純一の人格者として生活したいと努力してゐる。

●實際自分はどんな極端な事も敢て辭すまじき程の肉情にかられることがある。人の前では口にされぬ程の罪惡？を犯さうとすることがある。時に後悔せざるを得ざる事さへあるのだ。

●時に自分は一點の汚れもない心になつてみる。天國を心の中に造ることもある。何者もこれ以上神聖ではあらぬとさへ思ふこともある。全然肉を離れた神聖な純粹な愛に浸潤することもあるのだ。

●自分は自分の矛盾に苦しめられる。動物に墮したり神に上つたり、何れが本當の自分だか惑ふのである。頭では、矛盾に苦しむところにこそ本當の汝があるではないかと叫んで呉れるけれど未だ納得できぬ。

◎自分とはたへず自分の矛盾を統一し整齊し調和して純一不雜の理想的生活を送りたいと思ふ。そして尤もらしく頭でもつて文章に作り上げてみたり、人に説いて聞かせたりする。けれどそれも満足のできぬ解決だ。

◎頭でもつて理窟責にすれば解決もできないでもないが、未だどうしても不満足 of 存するのは眞の解決ができてゐない証據だ。解決したいと努力すればするほど解決ができなくなる。如何したらいいのだらう？

◎なるが儘になれ！自暴自棄になる人の心にも同情できる様になつた。酒や煙草や女に苦惱を忘れて一瞬間の天國を求むる人の心にも氣の毒な同情がよせられる様になつた。しかしそれ丈では自分の疑問は解けぬ。

◎懷疑！懷疑は懷疑を生む。幾何級數的に懷疑が蕃殖してゆくのみと思はれぬ。解決は到底できぬ。解決ができたと思つてゐてもすぐつきくづれて了ふ解決は一時の解決にすぎぬ。永久の解決はないのか？

◎信仰！生きてゆくには信仰が必要だといふ。成程さうであらう。信ぜなくては一時でも安ぜられぬから。けれど信じても片づ端から懷疑が起つて來てその信仰をつき崩して行くとするれば如何しやう？

◎凡てが自分には謎だ。何もかもわからぬ。わかつた様な顔をしてゐてもわからないから仕方がない。先生達や識者達の意見に訊いてみてもわからぬ。いゝ加減の説明はして呉れても自分には本當に解らない。

◎わからぬ乍らも自分は日々に生きてゐて居る。生は絶えざる流轉だ。わかつてもわからなくてもドン／＼生きてゆく。次第に凡てが變化してゆく、推移してゆく。自分には愈わからなくなる。矢張生活はし乍ら。

◎自分はよくわからぬけれど、この皆目わからぬものをわからせたくてならぬ。好奇心かも知れぬ。この如何してもわからぬものをどうかしてわからせたい。わかつてわからなくてもわからせたいと思ふのだ。

◎龍南三年の生活！自分は何をなしたであらうか？

人生中最も變化あり有意義なるべしといふこの三年間を如何に費したか？自分は自分に答へられぬのがもどかしい。とにかく今年は大學に入られる事になった。

●大臣の姿も自分には有難くなつた。博士も實業家も大したものとは思はぬ。

●自分には有難い者は矢張人だ。畜生にも神にもなりうる人だ。トヌストイの様な人だ。一個の人たる事だ。

●青葉の蔭も大分ぬくもつて來た。おゝ、もう午に間もない。あと二十五六日しかない。學校の業もこゝ、二週間位のものだらう。試験も近づいた。どれ、一つ晩強でもしていゝ成績で卒業した方がいゝかも知れぬ。

(八、五、二五)

“Ein verworfener Mensch”

緒言

一、三、四 田中省三郎

——自分は怠惰者だ。眞の怠惰者だ。それは偽で

はない。

けれ共永遠の怠惰が唯一の生活態度としたら、此の陰鬱な気分は自分から放れるだらう。解らないとしてかゝる心的状態が獨り人間にのみ賦與されてあるを思へば——靈魂の零圍氣は天上と地上とごつちやに混合した様に見わる。さちば裏に靈性の法則のはげしく暴行するが故に、こは抑も何たる不自然の生物ぞ。……此の地上は自分に罪深き思ひの攻撃に堪わ兼ねた、聖き靈魂のための一つの煉獄と見わる。世界は無邊の否定となり一切の崇高、美、神聖はそれ自から嘲笑に變じた。(中略)然しながら唯單にその下で凡てのものを憔悴せしむる粗きザールを悟るといふことは、また何たる恐怖ぞ。意志の些々たる努力が、このザールを裂き破るに充分であり且つそのものとして永遠ならしむるを知るべく、かくて尙最後の最も少ささものととして生存する。……

(ドラフトエフスキの書翰の一節)

肉破れ血流るゝ肩に粗石を擔いで運ぶ道すがら無心の少女の手から小さな一錢の銅貨をうけて涙を落し